

愛着研究の再検討と応用の可能性

Possibility of review and application of attachment research

松本 千明

Chiaki Matsumoto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：愛着，依存，対人依存欲求尺度

Key words : Attachment, Dependency, Scale for Interpersonal Dependency needs

1. 研究目的

1-1. はじめに

愛着の定義はさまざまなものがある。一般には「ある特定の対象とのあいだに形成される愛情の絆」と定義されている。そして愛着は生涯にわたり発達していくものと捉えられている。対して依存は自立に向かっていくものである。愛着では、依存とは異なり愛着スタイルというタイプに分類することができる。個人が形成する、愛着の質を愛着スタイルで説明している。そして愛着スタイルは、愛着以外の対人関係でも適応される。例えば、金政・大坊(2003)では青年期の愛着スタイルと友人関係における社会的適応性の関連を明らかにし、安定型の愛着スタイル傾向は、精神的健康の良さと正の相関であることなどを明らかにした。金政(2007)は青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連では、青年期の愛着スタイルが個人間の適応性とも関連することを示している。すなわち、愛着対象との相互作用による、愛着スタイルから対人関係を説明している。一方で依存は、誰に、何を、どの程度、依存したいかという現実的な対人関係を説明している。例えば、高橋(1968a)では、依存性を、「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義している。また関(1982)では依存を、「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義している。「何かしてほしい」など現象によっては愛着でも依存でも説明できるが、信頼してほしい、関係を築きたい、といったことは愛着では説明ができないものもある。依存は欲求レベルで説明しているため、機能を捉えていない愛着ではなくより現実的な対人関係を説明する依存という対人関

係に注目して研究を行いたいと考えた。

そのため依存という対人関係に焦点を置き、「対人依存欲求尺度の作成」の研究を行うこととした。

1-2. 依存の研究について

日本における依存の研究は、津守・稲毛(1960)による、1・2歳児を対象として、依存性の個人的傾向を明らかにし、依存行動と独立行動との関係を検討する研究から始まった。高橋(1968a)では、各発達段階における依存のあり方や構造を検討している研究を行っており、依存性を、「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義している。そして依存行動のパターンとして依存行動の様式とそのドミナンス・依存要求が生じた際に依存行動が向けられる対象・各対象に対してむけられる依存行動をひきおこす依存要求の強度、の3点に注目し、大学生女子の依存性について、対象を“母親”“父親”“もっとも親しいきょうだいの一人”“もっとも親しい友人”“ごく普通の友人のひとり”“異性で一番好きな人”“最も尊敬している先生のひとり”“もっとも尊敬している人”の対象ごとに評価を行い研究している。単一の焦点となる対象としては、母親、愛情の対象、尊敬する人などが多く、同性の親友や父親は少ないことを明らかにしている。また高橋(1968b)では、大学生女子と高校生女子の依存性の比較を行い、単一の焦点となる対象としては、高校生では母親、次に愛情の対象、親友となっており、父親・きょうだいは焦点になりにくい。母親はより一層強く依存行動をひきおこす重要な対象であることなどが明らかにしている。さらに高橋(1970c)では、大学・高校生と中学女子の依存の比較研究を行い、単一の焦点となる対象としては、中学生では母親が特に多く、母親は女子においては一貫して重要

な依存行動のむけられる対象であるが、中学生ではまた一段とそうである結果などが明らかになった。

一方、関(1982)では、依存と他の心理特性の関連を検討している。依存を、「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、依存性のあり方を、依存欲求・統合された依存性・依存の拒否の3つの変数によって表し、依存対象を限定せずに研究を行い、統合された依存性の高い人は、低い人よりも、自己像の肯定度は高いことなどを明らかにしている。このことから統合された依存性の高い事と、適応の良い事の関連が明らかにされ、依存を肯定的に捉えている。

1-3. 対人依存欲求尺度について

依存欲求を測定する尺度としては、田中(2003)の依存欲求尺度と竹澤・小玉(2004)の対人依存欲求尺度の2つがある。田中(2003)では、「他者からの道具的な支援、あるいは、精神的な支援を求める欲求」を依存欲求と定義して、「父」「母」「同性の友人」「恋人」の依存対象ごとの依存欲求を測定する依存欲求尺度を作成している。そしてこの尺度では、「精神的な支え」「相談・コミュニケーション」「指導・アドバイス」「道具的支援」の4因子が抽出され、青年期における、依存対象ごとの依存欲求を測定できる。

また、竹澤・小玉(2004)は、「是認・支持・助力・保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにしたい欲求」と定義し、対象を限定せずに、個人の依存傾向を測定する対人依存欲求尺度を作成している。そしてこの尺度では、「情緒的依存欲求」「道具的依存欲求」の2因子が抽出され、大学生を対象とした、個人の依存傾向が測定できる。

この2つの尺度の依存の捉え方には、依存対象ごとの依存欲求を測定する場合と、対象を限定せずに個人の依存傾向を測定する2パターンがあり、依存の捉え方に差異がある。

1-4. 本研究の目的と意義

そのため本研究では、尺度項目を再検討し、対象ごとの依存欲求も個人の依存傾向も測定できる新たな依存欲求尺度を開発し(研究1)、さらに尺度の信頼性と妥当性の検討を行う(研究2)ことを目的とする。

本研究で開発した依存欲求尺度により、同一項目で依存対象ごとの依存欲求と個人の依存傾向を

測定することが可能となり、依存対象ごとの依存欲求と個人の依存傾向との差異が明らかとなる。これにより、①個人の依存欲求の妥当な捉え方と、②依存欲求と他の対人関係にまつわる諸変数との関連を検討することができる。

研究1 対人依存欲求尺度の作成

[調査対象]: 青年期(10代後半から20代)

[調査期間]: 2022年4月(予定)

[調査方法]: アンケート調査(株式会社クロスマーケティングに委託)

[調査項目]: 質問紙構成は以下の通りである。

(1)対人依存欲求尺度 70項目

項目の選定は、本研究を行う院生と指導教員計2名により行われた。田中(2003)の依存欲求尺度の候補項目(80項目)、竹澤・小玉(2004)対人依存欲求尺度(20項目)、田中(2009)恋人への依存性尺度「依存欲求」因子(13項目)の計113項目を項目候補として、内容の類似するものや分かりにくいものは、削除し、対人依存を測定するのに適切だと思われる項目を選定した。次に候補項目には、含まれなかった項目を新たに加え、依存の機能ごとに分類した。そして理解しやすい表現になるように留意しながら、適宜文言を整理し最終的に70項目を作成した。

評定の選択肢は、「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で行う。

(2)基本属性 (年齢や性別、都道府県)

[分析方法]: 因子分析を用いる。(予定)

研究2 対人依存欲求尺度の信頼性と妥当性の検討

[調査対象]: 検討中

[調査期間]: 2022年8月(予定)

[調査方法]: アンケート調査

[調査項目]: 研究Iで得た結果をもとに尺度項目の検討を行う。

[分析方法]: 検討中

2. 研究実施内容

オンラインで開催された日本心理臨床学会第41回大会を聴講し、尺度作成に関する理解が深めることができた。また、依存や尺度作成などに関する多くの文献を読むことで、対人依存欲求に関する知見を深めることができた。さらに3月専攻内で開催された修士論文構想発表会を行い、様々な指摘を得て、より詳細な研究計画へと修正を行った。

3. まとめと今後の課題

今年度は、愛着や依存、尺度作成に関する文献や先行研究を読み、知見を深めると共に、本研究の焦点を「対人依存欲求尺度の作成」に絞ることができた。

今後の課題としては、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の倫理審査の承認が得られ次第、調査を実施する。研究の計画は以下の通りで考えている。

3月 研究I(対人依存欲求尺度の作成)の大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得る

4月 調査実施

5月 分析(依存欲求の構造解明と尺度項目の決定)

6月 研究II(対人依存欲求尺度の信頼性と妥当性の検討)の大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得る

8月 調査実施

9月 分析(尺度の信頼性と妥当性の検討)

10月 論文執筆

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和3年度大学院生研究助成(B)(DB2124)より研究助成を受け行った。

主要参考文献

- 金政祐司・大坊郁夫(2003). 青年期の愛着スタイルと社会的適応性, 心理学研究, **74**, (5), 466-473.
- 金政祐司(2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連, 社会心理学研究, **22**, (3), 274-284.
- 高橋 恵子(1968a). 依存性の発達の研究:I 教育心理学研究, **16**, (1), 7-16.
- 高橋 恵子(1968b). 依存性の発達の研究:II—大学生との比較における高校生女子依存性—教育心理学研究, **16**, (4), 216-226.
- 高橋 恵子(1970c). 依存性の発達の研究:III—大学・高校生との比較における中学生女子の依存性—教育心理学研究, **18**, (2), 65-75.
- 竹澤 みどり・小玉 正博(2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310-319.
- 田中 純(2009). 青年期後期の恋人への依存性に関する研究:恋人との関係評価及び依存対象との関連から 九州大学心理学研究 **10**, 139-147.
- 田中 優(2003). 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, **4**, 229-239.
- 津守 真・稲毛 敦子(1960). 幼児の依存性に関する研究-依存性と親の養育態度および従順性の相互関連について- 教育心理学研究, **7**, (4), 210-272.